

■（１９７）長崎への原爆と釜石への艦砲 あらためて平和を考える夏に

敗戦７０年を前に、長崎の原爆資料館を訪ねると、曲の一節が頭に浮かんだ。「ああ許すまじ原爆を 三度許すまじ原爆を」。東京の町工場の工員が書いた詞に高校教諭が曲をつけた「原爆を許すまじ」。通った福岡の小学校は８月９日が登校日で皆で歌ったものだった。

同じ日、東日本大震災の被災地・岩手県釜石市は沖に現れた米英軍の軍艦から砲弾を撃ち込まれた。製鉄所が狙いで、約１カ月前にも本州初となる艦砲射撃を受けていた。２回の攻撃で市街地は壊滅。オランダ人捕虜や中国人労働者を含む１千人以上が犠牲になったとも言われる。それから６日後の降伏に、当時を知る市民は「何のための犠牲だったのか」と今も疑問を持ち続ける。長崎の被爆者も同じに違いない。釜石は艦砲射撃から６６年後、今度は大きな津波に襲われ、再び約１千人が犠牲になった。被災直後の市街地の状況は、艦砲射撃を受けた当時のまち、さらに被爆直後の長崎の様子にも重なって見える。

ただ、戦争と津波には決定的な違いがある。人の意思で防ぐことができるのか、できないのか、だろう。安保法案の国会審議であらためて平和を考える「夏」になった。（山）